

ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：国際日本学部 名前：貝柄 徹 作成日：2025年11月10日

1. 教育の責任

国際日本学部のディプロマ・ポリシーの「国際的視野に基づく歴史、言語、文化、文学の素養を持ち、俯瞰的、総合的なビジョンの形成に資する人材を育成」を踏まえ、カリキュラム体系を構築している。担当する講義において、カリキュラム・ポリシーの中から以下の要素について特に意識しながら教育を実施している。

- 1 過去の研究を通じて現在のあり方を確かめ、未来への手がかりを得ること。
- 2 一国史的なはっそうにとどまらないグローバルな歴史認識。

さらに地理学の観点で、日本や世界が抱えている諸問題の探求を行い、国際的な視野をもって活躍できるようにする。また、多様な文化を受容し、国際交流を通じた活動、行政などのまちづくり業務に従事できるようにする。

現在の担当講義科目

■大学院 比較文化研究科

- ・地理学特殊講義 I（春学期）、地理学特殊講義 II（秋学期）
- ・比較文化特論 I（春学期）
- ・比較文化特別研究（研究指導）（通年）

■国際日本学部

- ・地理学の扉（春学期の前半 8 回、秋学期の後半 8 回）
- ・都市災害と防災（自然地理学）（春学期）
- ・野外調査研究の方法（春学期）
- ・地域環境とエコロジー（秋学期）
- ・地理学総合講義（環境研究）（秋学期）
- ・フィールドワーク（多文化共生メジャー：秋学期の 1 日野外実習、後半 5 回担当）
- ・ゼミナール I（春学期）、ゼミナール II（秋学期）
- ・卒業研究（通年）

なお、野外調査研究の方法、地域環境とエコロジーは、A,Bと2種類を提供し、複数回履修を可能としている。

2. 教育の理念

「建学の精神である“STUDY FOR LIFE（生涯にわたる、人生のための学び）”および「豊かな教養と専門的学術、旺盛な自己開発精神、優れた国際感覚及び問題解決力を備えた人材を育成し、地域の教育・研究及び生涯学習の中心として、地域社会・国際社会に貢献する」という目的から大学時代の学修活動を踏まえ、生涯に亘って考えることのできる力を養うことを理念としている。答えのない問題に様々な観点、経験から挑むことが高等教育を受けた者の義務でもある。それが社会を運営してゆく一役となり、本人の生きてゆく力になり得ると考える。

3. 教育の方法

（1）教育の目的と目標

年次毎に代表的な講義について記載する。

1 年次対象の「地理学の扉」:

大学から始まる学問体系の導入を行うことで、「社会的基盤能力」を養う。オムニバス形式で 2 人の教員で担当している。貝柄が主に自然、環境的な内容、もう一人の教員が人文、地域史的な内容を講義する。史学コース（日本史、東洋史、西洋史、考古学、地理学）を志望する学生の中でも、当初から「地理学」を志望する学生は多くない。高等学校時代に履修する機会がない者も多い。また小・中学校時代の暗記科目のイメージがあるからかもしれない。大学で扱う「地理学」の懐の深さを実感してもらい、暗記で

ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：国際日本学部 名前：貝柄 徹 作成日：2025年11月10日

はなく、考える力の重要性を理解してもらい地理学に興味を持つよう2名の教員とも2年次、3年次科目の要点をテーマにしている。

1週間後の授業では前回の学生のコメントを一部抜粋し、知識の定着を図っている。

2年次対象の「都市災害と防災（自然地理学）」：

国内外で発生している自然災害の事例とメカニズムを知ることを目的とする。本講義は中学校教諭「社会」、高等学校教諭「地理歴史」免許状の必須科目でもある。教員として生徒の生命と安全を確保する必要はもちろんのこと、これは教員以外の職場や家庭でも当てはまることである。自然災害のおおよそのメカニズムを知り、防災意識、リスク管理の重要性を高めることを目標としている。多少は理化学的な内容を扱わねばならないが、数学物理が苦手な学生は嫌悪感を示すことから極めて平易に講義している。

3年次対象の「地域環境とエコロジー」：

世界で発生している地域問題、環境問題を論ずることで、「思考基盤能力」を養う。イスラム圏やインドの食、宗教など異文化の紹介を通して、多文化共生社会の一員となることを目標とする。隔年で2種類の講義を実施している。大きく分類すると、開発途上国の諸問題とエコロジー社会の状況である。水資源、ごみ問題、フェアトレードなど大スケールのものから外来種問題、発酵食品など多様な食文化などを学生の目線できりあげている。2025年度は「地域環境とエコロジー-A」として、異文化の受容について扱う。具体的にはイスラムの文化が、各国の建築を始め、様々な文化への影響の伝播をもたらしていること、インドの文化から半科学、非科学的な内容まで紹介し、さらに食文化まで至ることを目標にしている。その先には発酵など保存食の文化やフェアトレードも範疇に入れる。3年次ゆえ、グループでの様々な意見の検討、発表も取り入れている。

また3年次対象の「野外調査研究の方法」では、実際に野外の巡検に出かけるため、グループによる企画力、コミュニケーション力、リーダーシップ、行動力を促すことで、「思考基盤能力」を養う。今年は大学が位置する西宮から少し離れた大阪、神戸付近まで赴くことができた。

2025年度から多文化共生メジャーの「フィールドワーク」が加わった。前半5回で訪問場所の事前学習、野外調査を1日（5回分に相当）、後半5回で現地調査の結果をまとめて発表を試みている。本年度は10月の土曜日に一日、神戸市長田区を訪問し、在日のコリアン、スペイン、ポルトガル、ミャンマー、ベトナム人の歴史と現状、文化を目の当たりにした。

その他、テーマの選択、文献の探索、データの地図化などの講義があり、地理学で開講しているすべての講義は、3年次の「ゼミナール」、4年次の「卒業研究」につながっている。先行研究の収集、文献解題、発表を経て、論文を作成に導く。最終的には「社会的基盤能力」「思考基盤能力」「思考基盤能力」の総合的獲得を目指している。

(2) 教育実践

昨今、教科書は指定していない。参考書を指定するが、図書館などでもまったく閲覧しないのが現状である。そのため現在では新聞記事の配布や自分の調査した地域の写真、収集していた災害や各地域の文化に関するビデオを要約して見せる機会が増えてきた。文字よりも写真や動画の情報に慣れていることも起因している。また社会問題など、多様な解釈のある問題などについては、単に情報を与え、それについて小グループに分けて議論、検討させることも実践している。社会問題、地域問題の解決は正しい答えのない問題で、暗記では思考範囲が広がらない。あくまでも正しい答えではなく、様々な考え、捉え方ができるように思考する講義を前提に置いている。

3年次ではさらにグループ討論の時間を増やしている。特に「地域環境とエコロジー」では、様々な解釈のある情報を与え、それについて周りの意見を聞き、自分の意見との違いを検討させている。ただ講義テーマによっては時間がなくなり、討論できず残念な回も生じる。「野外調査研究の方法」ではグループ内で野外調査地域（巡検地）の検討、調査対象の担当、分類などをさせ、実際に近場の巡検地を訪れ、現地で各項目の責任者による発表を試みている。また最後には各人による「夢の巡検企画」（国内外を問わず）を提案およびその発表を実施している。web検索を通して、実現可能性、独創性、企画力など総合的な観点から評価してい

ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：国際日本学部 名前：貝柄 徹 作成日：2025年11月10日

る。ただ学生にとっての「夢」の幅に関して個人差が大きい。様々な経験を有した教育（学校・家庭）を受けた学生とそうでない学生とでかなりの開きがある。具体的には珍しい外国の訪問を夢としてあげる者と京都などの近場を夢としてあげる者も存在する。本当は、多くの大学で実施しているゼミや教室単位での国内実習（3泊4日程度）、ゼミ合宿、海外研修などを企画したいが、現状では厳しく、多種多様な学生への対応が求められると実感している。

4. 教育の成果

当初、字句の説明や穴埋めの問題はしないということで、「試験勉強がしにく」などの意見があったが、講義を進めるうちに、考えることの重要性に気がつくようである。ただ学生気質かもしれないが、コミュニケーション力の養成が課題と言える。グループでも自分の意見を述べず、他人の意見に同調するだけの学生が多く、活気に欠けることがある。

座学講義と実習（野外調査・巡検）は一体のもので、2年次までの座学講義を経て、3年春学期に野外調査・巡検を実施、3年秋学期には空中写真判読などを通した室内実習作業をすることで、卒業論文作成時に困らないようなカリキュラム構成を考えている。親しくなるに連れて議論するようになってきた。

本来ゼミはそうであるはずだが、一部規定通りに履修せず（時間割的に無理の場合もあり）、ゼミ生と3年になって初めて会うものもいる。性格にもよるが、最後まで多くのゼミ生とは一線を画す学生も存在する。

課題レポート（コメント用紙）も授業最後の10分では十分に書けず、あるいは数行書いて終了の学生もいるが、次週までの課題とすることでほとんどの学生は記述するようになった。Chat GPTなどのAIを利用している者もいるが、現状では読めば参考にしたかどうかは判明できる。

3年のゼミナール、4年の卒業研究では、論文作成のみならず、キャリアについても考えさせ、新卒での正社員のメリットを実感させることで、就職や進学に繋げている。公務員（役所、警察、教員）や準公務員（郵政）、団体職員、一般企業（メーカー、運輸、サービスなど）多岐な方面に進んでいる。他大学の大学院に進学し、教員（中学校、高等学校、高等専門学校）になった者もいる。学生時代の学修に直結するGIS（地理情報システム）コンサルタント、測量などの地図製作会社への就職も増えており、卒業後の連絡や集りが盛んな学年も存在する。

5. 改善への努力と今後の目標

高等学校時代からPBL型と称した学習形態を経験してきた者も多い。ただ1、2年次の基礎的な授業を履修しないままでは問題解決するような討論は難しい。あくまでも理論をふまえた上で、討論してほしいと希望する。

当初から「地理学」を希望して入学してくる学生は少ない。いかに興味を持たせるかが大きな課題と言える。

教室でのグループ討論などがやりにくい2年生クラスなどで、相互コミュニケーションをはかっていくことも課題の一つである。

また、野外巡検などは西宮市の北部、南部のほか、神戸、宝塚、大阪あたりまで実施してきたが、今後、休日を利用し、自治体の協力が得られた近畿圏の田園部まで徐々に範囲を広げたいと考えている。ただ時間的制約、学生の交通費負担なども考慮しなければならない。

【添付資料】

- ① 1年次対象講義「地理学の扉」PowerPoint 資料
- ② 2年次対象講義「都市災害と防災（自然地理学）」PowerPoint 資料
- ③ 授業アンケート「地理学の扉」「都市災害と防災（自然地理学）」など